

あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

11
2019



あなたの初めは小さくあっても
あなたの終りは非常に大きくなるであろう。
(ヨブ記 8:7)

純福音東京教会・出版部

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgte.jp

Full Gospel Tokyo Church

CONTENTS

- 2 成功的变化を夢見るならば イ・ヨンフン牧師
- 3 生ける水の川 チョー・ヨンギ牧師
・感謝と賛美
- 5 メッセージ 志垣重政牧師
・信仰の薄い者よ
- 8 神の国 アシエル・イントレーター牧師
・「右に」_1部：預言されたメシヤ
- 13 主と歩む ヘンリー・グルーバー牧師
・誰がキリストの兄弟を迫害しようか？
- 19 信仰の明文化を成し遂げますように④ イ・ヨンフン牧師
・この時のためであるかもしれない
- 24 我が人生のプラス
・宗教家から信仰人へ
・主がおぶって導かれる道
- 36 牧会の香り ユン・ジョンホ牧師
・時が良くても悪くても伝道します
- 40 先生、これが知りたいです シン・ソンジョン牧師
・聖母マリヤは、カトリック教会が言うように生涯処女でしたか？
- 42 愛 | ソル・ウンス牧師
韓国とイスラエルはひとつの家族になるでしょう
- 48 信仰界 COVER STORY | イ・ジョンフン教授
・「神様から与えられた自由を必ず守り抜かなければなりません」

この「しなげ」は、おもに韓国版信仰界 2019 年 10 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

成功的变化を夢見るならば――

「新しい」という言葉はもはや新しくありません。最近、この世はすべてが新しいからです。私たちの意志とは関係なく、この世は変化に変化を重ねています。このような世に適用するために、人々は変化しようと常に努力しています。新しいことを学び、新しい経験を積み、新しい人に会うなどの努力をします。しかし残念ながら、いかに努力しても変わらずに残される人がいます。

それには様々な理由があると思いますが、おもに変化の始まりが間違っている場合が多いです。人々は、変化は新しく始めるものだと考えます。しかし、変化の始まりは新しく始めるのではなく、過去のを終わらせることです。過去の方法や価値観に捉われたままに新しく始めても、方向が明確でないために、すべての努力は無駄に終わるばかりです。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければなりません。古きものを取り除くときに、新しい変化が始まるようになるのです。真の変化を夢見るならば、過去の栄光に捉われずに、新しいヴィジョンを持って進んでいかなければなりません。

私たちの信仰も同じです。私たちの古き人が十字架上で死んでこそ、新しい人として新生することができます。古いものが過ぎ去ってこそ、新しいものが臨むのです（Ⅱコリント 5:17）。『古きものが死ぬ』ということは、倫理的、道徳的な罪を犯さないという意味ではありません。言葉どおり、世に対して死ぬことです。この世において大事に思うこと、名誉、お金、権力だけではなく、人々からの称賛や認めも捨てなければなりません。この世で学び覚えた道徳や倫理意識もすべて捨てなければならないのです。私たちが望むべき新しい人は、世間でいう道徳的な人、善良な人ではありません。神の御心に従って生きる人です。新しく生まれ変わった人は、天の御国の名誉や豊かさを得るために努め、主が定められた道徳や倫理を追求する人です。もはや私たちはこの世に属した古き人を徹底に切り捨て、主にあって変化された新しい人として生きていけるよう、主イエス・キリストの御名によって祝福します。†

感謝と賛美

ヨシャパテ王がユダの王位に着き、善政を敷いていた時、モアブ人、アンモン人、およびメウニ人たちが連合軍を編成して、ユダを攻めてきました。急な攻めを受けたユダは、これを防備することができず、後退を重ねて、首都エルサレムまで敵は押し迫ってきました。

このとき、ヨシャパテ王はユダ全国に断食を宣布して、自分も麻の衣を着て、文武百官たちと共に神様の聖殿の庭で跪きました。そして、神様に向かって胸を割く祈りを捧げました。

「われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはこのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかにすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」（歴代志下 20:12）。

ヨシャパテ王から民に至るまで、すべての人は断食して、神様に叫ぶと、神様の聖霊が民の中の一人の口を通して預言の御言葉を与えてくださいました。

「これはあなたがたの戦いではなく、主の戦いだからである。」（歴代志下 20:15）

趙 鏞基
ヨイド純福音教会元老牧師



ヨシャパテ王は神様の約束の御言葉を聞いて、大きな慰めを受けました。そして、その御言葉を信じました。

王はすぐ様聖歌隊を組織して、聖なる礼服を着させ、彼らを先発隊として戦場に送り出しました。戦いに行くとき、聖歌隊を組織して臨んだことは、歴史が始まった以来、初めてのことでした。イスラエルの民が城門から出てくることを見るや、敵は怒涛のように押し寄せ始めました。そのとき、先だって行っていた聖歌隊員たちは一斉歌い始めました。

「主に感謝せよ。その慈しみは永遠である。」

イスラエルの民が歌を歌い始めると、奇跡が起こりました。敵陣で急に味方同士に剣で刺し合う事態が起こり、敵は瞬く間に全滅してしまいました。ヨシャパテ王を始め、ユダの民たちは彼らが逆境と絶望に陥ったとき、神様を恨まず、むしろ感謝して賛美しました。

感謝と賛美は私たちの逆境と艱難と絶望を、神様がいらっしゃるって、解決してくださるようになる偉大な力があります。今、皆さんが絶望の中にいると感謝してください。感謝と賛美こそ、絶望を克服して、勝利に導く信仰の秘訣です。†



メッセージ

志垣重政 牧師 純福音東京教会



信仰の薄い者よ

—— マタイによる福音書 14 章 22 ～ 33 節 ——

それからすぐ、イエスは群衆を解散させておられる間に、しいて弟子たちを舟に乗り込ませ、向こう岸へ先におやりになった。そして群衆を解散させてから、祈るためひそかに山へ登られた。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。ところが舟は、もうすでに陸から数丁も離れており、逆風が吹いていたために、波に悩まされていた。イエスは夜明けの四時ごろ、海の上を歩いて彼らの方へ行かれた。弟子たちは、イエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと言っておじ惑い、恐怖のあまり叫び声をあげた。しかし、イエスはすぐに彼らに声をかけて、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」と言われた。するとペテロが答えて言った、「主よ、あなたでしたか。では、わたしに命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください。」イエスは、「おいでなさい」と言われたので、ペテロは舟からおり、水の上を歩いてイエスのところへ行った。しかし、風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけたので、彼は叫んで、「主よ、お助けください」と言った。イエスはすぐに手を伸ばし、彼をつかまえて言われた、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか。」ふたりが舟に乗り込むと、風はやんでしまった。舟の中にいた者たちはイエスを拝して、「ほんとうに、あなたは神の子です」と言った。

ベツサイダの荒野で多くの病人を癒し、五つのパンと二匹の魚で多くの民を満足させた後、イエス様ご自身は山に上で祈りに、弟子たちには先にガリラヤ湖の向こうの岸カペナウムに向かうよう指示されました。弟子たちは夜半に突然の風浪に遭い、パニック状態に陥りました。イエス様が現れるまでの約8時間苦戦苦闘をしていたことになります。主が現れた時、弟子たちは幽霊だと言って大騒ぎをしましたが、ペテロだけは『主よ、あなたでしたか。では、私に命じて、水の上を渡ってみもとに行かせてください』と告白します。実際、ペテロは水の上を歩きました。その後、恐れを感じた瞬間に溺れたのも同じペテロでした。何が起き、何があったのでしょうか。

第一に、ペテロは啓示的知識を求めました。それまで水の上を歩くことなど考えたこともなく、また不可能だと思っていましたが、イエス様が歩かれているのを見て、自分も歩けるんだという、神の国の知識を得たのです。自分の知らない神の国の言葉、いわゆる御言葉を聞いたのです。主の言葉がなければ歩けないことを知っていたペテロに驚かされざるを得ません。神の国の知識を得る皆さんでありますように——。

また、水の上を歩くイエス様を見て、ペテロの考えが変わったことにも注目する必要があります。御言葉を聞くことは、考えが変わることに繋がります。罪が赦されたこと、聖霊充滿になれること、呪いから解放され祝福されること、永遠なる生命（いのち）を得たこと、これらの考えを持つことが新しく生まれ変わることだからです。

第二に、新しくなった自分を見つめました。ペテロが思い描

いたのは水の上を歩く自分の姿でした。しかし、風浪に遭った時、溺れる自分を想像しました。せっかく水の上を歩けたのに、溺れてしまいました。夢とは、貪欲ではなく、御言葉による希望を持つこと、心の願いを入れる器なのです。私たちも水の上を歩く夢を持ちましょう。それは、癒し、成功、人生の幸福です。私たちは夢を見るために十字架のもとに集まっています。神様が与えてくださる夢が、皆さんを捉え、夢の成就のために生きることができますように——。

第三に、ペテロは信仰の決断をしました。口では言ったものの、信頼がなければ歩き出すことはできません。主を信じたからこそ、水の上に踏み出したのです。私たちの信仰生活も同様です。「わたしはエジプトの国から、あなたをつれ出したあなたの神、主である。あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう。」（詩篇 81:10）——口を開く決断をしなければ、祝福を受け取ることができません。神の子として自信を持って、大胆に水の上に第一歩を踏み出しましょう。

第四に、ペテロは失敗しました。何故でしょう。信仰告白ができなかったからです。風浪に遭った時、『主がおられるから、私は恐れない』と告白すべきでした。恐れて叫んだ結果は、水に溺れることでした。小さな舵が船を操るように、小さな舌が私たちの人生や運命を支配します。信仰告白を通して、自分の人生を支配する皆さんでありますように、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。†

「右に」_1部：預言されたメシヤ

ダビデは偉大な王というイメージがあります。その彼がどのようにしてメシヤを「主」と呼べるのでしょうか。ダビデよりもっと偉大な存在、ダビデが主と呼ぶ方はだれでしょうか。このようにして、イエシュアはメシヤがどれほど偉大であるべきかに対する理解の『基準を高め』られます。



ヘブライ語の聖書（旧約）に出てくるメシヤに関する預言の中で、もっとも詩的で強力なものの一つが、詩篇 110 篇です。

ダビデの歌：「主はわが主に言われる、『わたしがあなたのもろもろの敵をあなたの足台とするまで、わたしの右に座せよ』と。主はあなたの力あるつえをシオンから出される。あなたはもろもろの敵のなかで治めよ。あなたの民は、あなたがその軍勢を聖なる山々に導く日に心から喜んでおのれをささげるであろう。あなたの若者は朝の胎から出る露のようにあなたに来るであらう。」

う。主は誓いを立てて、み心を変えられることはない、『あなたはメルキゼデクの位にしたがってとこしえに祭司である。』主はあなたの右におられて、その怒りの日に王たちを打ち破られる。主はもろもろの国のなかでさばきを行い、しかばねをもって満たし、広い地を治める首領たちを打ち破られる。彼は道のほとりの川からくんで飲み、それによって、そのこうべをあげるであらう。」

詩篇 110 篇は苦難を受ける僕ではなく、能力に満ちたメシヤを示しています。この詩篇には、『右に』という言葉が二回出てきます。これは、ヤーウェとメシヤの間の緊密なパートナーシップを現します。ひとりの人が右腕で深い愛をもって他の人を抱きしめる、親密さのようなものです。右腕は普通、戦時に武器を持ちます。右手は他の人に祝福を伝えます。

右の手、もしくは『右の腕』を指すヘブル語の単語は、ヤミン ימין です。息子を指す単語はベン בן です。メシヤは『神の右の手の子』として、究極的な『ベニヤミン』的人物です。主の祝福と好意、能力を受ける子という意味です。

詩篇 110 篇で、敵の中で『治める』という意味で使われた単語はルドウ לְדָוָם です。これは創世記 1 章で神様がアダムとエバに、地とその中のすべての被造物に対して『治めよ』と仰せられたときに使われた単語と同一です（創世記 1:26、28）。このようにメシヤは詩篇 110 篇で、神様が創造世界を治めよと、人類にくださった委任を成就するものとして出てきます。メシヤはアダムが失敗した部分において成功されるのです。

この詩篇は王であり軍隊の長官、レビ系列でない祭司長、士

師としてのメシヤに関する言葉です。彼は主の民と軍人たちに囲まれています。敵を滅ぼされ、残された者たちを治められます。暁のように永遠であられ、小川で水を飲む人のように人格的な方です。このメシヤなる王はダビデの系列であられるが、それ以上であられます。彼は「スーパー英雄」ダビデです。イエシュアはメシヤに関して教えられながら、親しく二つの人物を対比させられます。

ダビデよりもさらに偉大な存在

『あなたがたはキリストをどう思うか。だれの子なのか。』彼らは『ダビデの子です』と答えた。イエスは言われた、「それではどうして、ダビデが御霊に感じてキリストを主と呼んでいるのか。すなわち『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい。』このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいるなら、キリストはどうしてダビデの子であろうか。」(マタイ 22:42～45)

おそらくこの部分をヘブル語で読む読者たちは、征服し勝利するメシヤに対する描写を見出したはずですが、イエシュアはメシヤに関する観点が本文の細部事項のパターンとして、「人間以上」でなくてはならないことを指摘されます。

ダビデは偉大な王のイメージです。彼がどのようにメシヤを『主』と呼べるのでしょうか。ダビデよりももっと偉大な存在、ダビデが『主』と呼ぶ方はだれでしょうか。このようにして、イエシュアはメシヤがどれほど偉大であるべきかに対する理解の『基準を高め』られます。

そうしてイエシュアは、もう一歩前に進められます。捕えられてサンヘドリンの前で審判を受けられたまさにその時、イエシュアはさらに大胆な発言をされます。イエシュアは黙しておりましたが、その時の大祭司は彼に誓って発言するように要求しました。

「しかし、イエスは黙っておられた。そこで大祭司は言った、『あなたは神の子キリストなのかどうか、生ける神に誓ってわれわれに答えよ。』イエスは彼に言われた、『あなたの言うとおりでである。しかし、わたしは言うておく。あなたがたは、間もなく、人の子が力ある者の右に座し、天の雲に乗って来るのを見るであろう。』」(マタイ 26:63～64)

イエシュアはご自身について証言することを願いませんでした。しかし大祭司は、神聖な任命を受けた自身の職位を利用し、イエシュアに誓って発言することを要求した時、イエシュアは当然そうするしかありませんでした。だからただこのように言われました。「私の返事はすでにあなたが話したとおりでである。」言い換えるならば、「そうだ」ということでした。

こういう場合、イエシュアは再び詩篇 110 篇だけでなく、ダニエル 7 章も引用されます。この二つは、メシヤの最も『栄化された』姿が預言にあらわれる部分です。イエシュアは事実、「そうだ、私がまことのメシヤである。最も正常的なダビデの後継者であるだけでなく、メシヤに関する最も驚くべき、強力な預言をみてもそうである。これはまぎれもなく私である」と言われました。人間イエシュアの弱さの瞬間、つまり十字架に向かう道に、ご自分が栄光に満ちた力強いメシヤであると宣言されたのです。

私は、人は合理的な質問ができるものだと思います。「天の御父の右に座しておられるメシヤに関する預言があるならば、その方はどのように天に昇られたのでしょうか？」——この質問は福音書の最後に、そして使徒行伝の初めに答えがあります。復活の後、弟子達に 40 日間あらわれた後（それにより弟子達に、ご自身が生きておられ、復活が真実に实际的で肉体的であることを証明された後）、イエシュアは彼らが見ているなか天に昇られました。

「主イエスは彼らに語り終ってから、天にあげられ、神の右にすわられた。」（マルコ 16:19）

トローラーでヤーウェの御使いが雲に囲まれたように、また、天の雲がエリヤを持ち上げて火馬車で引っ張っていったように、イエシュアも霊的な雲によって天に持ち上げられました。天に上げられたこのイエシュアは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、また来られます。（使徒 1:11）

ですから福音書の叙述は、ダニエル書と詩篇に示された、メシヤが神様の右に引き上げられるという、預言の成就で締めくくられます。†

アシェル・イントレーター 牧師・リバイブ・イスラエル代表



リバイブ・イスラエル (www.reviveisrael.org) 創立者であり、国際ティクン代表である。ラビ家庭のユダヤ人であり、アメリカのハーバード大学を首席で卒業した後、イエス様に奇跡的に出会った。1991年イスラエルに移住、正統派ラビたちと共に長年の間聖書研究を続けながら教会とイスラエルの関係、ユダヤ人と異邦人の間で和解とイスラエル回復のためのビジョンを持って働いておられる。

＊ヘンリー・グルーバー牧師の主と歩む 

誰がキリストの兄弟を迫害しようか？

神様は世界でなく、イスラエルを中心に全地を治められた。今も神様はイスラエルを中心に世を治められている。イスラエルはこのような政治的でなく霊的に理解する時にのみ、再び来られる主の道を準備するため、イスラエルをどのように助けるのか理解できる。



イエス様はこのような言われた。

「人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。」（マタイ 25:31～33）

1957年7月、イスラエルのベングリオン首相は、このように
宣布した。『二千年間、私たちはこの瞬間を待って来て、時が十分
に満ちるとその誰もが神様の前に面と向かって立つことがで
きない。』イスラエルが立ち返りながら、聖書の御言葉の中に埋
もれていた最後の時にイスラエルが回復されるという予言の御
言葉が、私たちの目の前で成就された。二千年間、土地も指導
者も聖殿もなく世界に散らばり、終わりなく迫害を受けて、ヒ
トラーにより絶滅の危機に瀕していた民族が、一日で国家とし
て誕生した。聖書はこの事件に対して次のように言っている。

「一つの国は一日の苦しみで生れるだろうか。一つの国民はひ
と時に生れるだろうか。しかし、シオンは産みの苦しみをする
やいなや／その子らを産んだ。」(イザヤ 66:8b)

ベングリオンは1956年シオニズム演説の中で、『イスラエル
の古都帰還は、メシヤ帰還の始まりである』と語った。クリスチャ
ンたちはユダヤ人たちがイエス・キリストの新約を分らない
と無視するが、ユダヤ人たちは1948年イスラエルの再建がメシ
ヤ時代を開く事件であることを明確に理解していた。多くのユ
ダヤ人たちが目に覆いを掛けられ、ユダヤ人とすべての人類の
メシヤであられるイエス・キリストを見ることができないよう
に、多くのクリスチャンたちがイスラエルの建国とエルサレム
の回復の意味を理解することができない。古代イスラエルはイ
エス・キリストの初臨のために、現代のイスラエルの建国はイ
エス・キリストの再臨のために準備された。

神様は私たちに心と霊と力を尽くして神様を愛しなさいと言
われた。心から愛すること、このようにすべてのことを尽くし

て愛すること、それが神様を理解できる唯一なる愛の方式であ
るため、神様は私たちを心と霊と自身の能力と尽くして愛して
くださる。

キリストは新婦である私たちを燃える愛で愛し、私たちがキ
リストをそのように熱く愛する時、満足される。キリストは新
婦のため十字架で死なれ復活された。父なる神はキリストの中
で聖徒たちに天の栄光を注がれ、天の権勢と能力を遺法として
与え、復活の力を経験できるように許してくださった。キリス
トは栄光の中で、すべての天使を率いて新婦を迎えようこの
地に来られるため、天と地を準備させようとしておられる。

ヨシュアがカナンの地を征服し、イスラエルを建てた以後、
神様はイスラエルを「神の瞳」であると言われた。イスラエル
のために働かれる神様の統治原理と摂理を通して、神様を理解
しようとしたからである。古代イスラエルは世界の中の一国で
なく、神様が救いの歴史のために選択された唯一なる器であっ
た。

神様は世界でなく、イスラエルを中心に全地を治められた。
今も神様はイスラエルを中心に世を治められている。イスラエ
ルはこのように政治的でなく霊的に理解する時にのみ、再び来
られる主の道を準備するため、イスラエルをどのように助ける
のか理解できる。

イスラエルを祝福する者へ

アブラハムに、「おまえを祝福する者を私は祝福し、おまえを
呪う者を私は呪う」と言われた御言葉のような原理で、キリス
トの兄弟の中で一番小さな者へしたようにそのまま返されると
主は言われた。苦難の中にいるキリストの兄弟を、アブラハム

の子孫を顧みることをせずに、呪いを受けないことがあろうか？
キリストの兄弟、アブラハムの子孫を虐待し、審判を受けないことがあろうか？

不幸にもヨーロッパと北アメリカの教会は、長い間アブラハムの子孫であり、キリストの子孫を虐待してきた。初代教会の時には、書簡書や歴史的文献が示しているように、エルサレムが信仰の中心地であった。マルコの屋根裏部屋で聖霊が臨み、ペテロの説教を通し三千名が一日でイエス・キリストを信じるほどに驚くべきリバイバルが起きた後に、エルサレムの信仰共同体は繁栄してヨーロッパや中東の教会は謙遜にエルサレムの使徒たちの指導を受けた。西暦 70 年、エルサレムが陥落し、ユダヤ人が全世界に散らばって生きながら、エルサレムの教会の勢力は傾くようになった。すると、使徒パウロがローマで警告したまさにそのことが起きた。

「そこで、わたしは問う、『神はその民を捨てたのであろうか。』
断じてそうではない。」（ローマ 11:1a）。

目に見えるイスラエル国家が消え去り、エルサレム教会の位相も弱くなると、非ユダヤ人たちでいっぱいになった教会の中で、神様がイスラエルを捨てて教会の代わりに救いの通路として選ばれたのではないかと話され始めた。そうして、教父の中では大胆に神様がイスラエルを捨てられ、今や霊的なイスラエルである教会がその座を代わりに占められたという神学が生まれた。

コンスタンチン皇帝が、四世紀にキリスト教を国教として定めながら、その時まで互いに競争関係であったユダヤ教とキリ

スト教の中で、キリスト教に有利な法律を裁定し、ユダヤ教は更に没落するようになった。ローマカトリック教会は、四旬節の期間ごとにユダヤ人がイエス・キリストを殺して、キリストに対する呪いを自ら呼び起こしたという事実を説教した。ローマ人ポンティオ・ピラトとローマ兵士、そして私たちの罪よりはユダヤ人の罪を更に大きく浮き彫りにさせた。

その結果、反ユダヤ主義がヨーロッパで猛威を振るい、十世紀に十字軍はエルサレムを奪還するための遠征に出かける前に、ヨーロッパの国々に住んでいたユダヤ人たちを初めに虐殺し、会堂を火で燃やしながらエルサレムでも一万人ほど虐殺した。ヨーロッパの国々は、18 世紀に達するまでユダヤ人に、神様を死んだ者だと罪名をなすりつけ、自国内の政治的な不安を解消するスケープゴートにして、財産を奪って追放したり殺したりした。

プロテスタントも反ユダヤ教の罪から自由ではない。プロテスタント教会内に、カトリック教会の教父たちから受け継いだ遺産がいまだに多くあるが、その中で一番悪しきもののひとつが、神様はイスラエルが悪いので捨てて、教会を代わりに選んだという「置換神学（ちかんしんがく）」である。

ルターは初期には自身のようにカトリック教会へ、虐待を受けたユダヤ人に好意的であったが、ユダヤ人が改宗しないとユダヤ人の会堂は火で燃やして、悪いユダヤ人はドイツから追放され捨てられなければならないという説教をした。したがって二十世紀半ば、ヒトラーはユダヤ人を 600 万人殺害し、自身がルターの命令に従っているだけだと言ったのである。人口の 90% がクリスチャンであったドイツで、現代史に起こった事件である。キリスト教大陸ヨーロッパで、キリストの兄弟であり、

アブラハムの子孫であるユダヤ人 600 万人が虐殺された後、一つの世代が過ぎる前にヨーロッパ教会は外側の皮だけが残った。

「あなたと争う者は滅びて無に帰する。」(イザヤ 41:11b)
「あなたがたにさわる者は、彼の目の玉にさわるのであるから、」
(ゼカリヤ 2:8a)

「あなたはその枝に対して誇ってはならない。たとえ誇るとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのである。 / 高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。」(ローマ 11:18, 20b)

トルーマン大統領を通してイスラエルの建国を助け、ユダヤ人たちを歓迎し、イスラエルの回復のために祈り、財政を支援したアメリカが、依然としてキリスト教が栄えて国家が強力であるという事実は、神様がイエス様の来られる通路であるイスラエルを助ける国家をどのように祝福するのかをよく見せてくださっている。†

ヘンリー・グルーバー

(Henry Gruver) 牧師



「世を歩くとりなし祈り手」として知られている筆者は、18 歳の時からアメリカ・アリゾナ州・フェニックスの犯罪多発地域で主と共に歩き始め、今まで主と共に歩いている。彼は全世界のどこでも彼が出会った人たちのために祈り、福音を伝えている。彼の人生には超自然的な奇跡が多くあるが、もっと重要なことは、彼が神の御言葉に従順して歩きながら祈っているという事実である。

＊信仰の明文化を成し遂げますように④

| イ・ヨンフン 牧師 ヨイド純福音教会

この時のためであるかもしれない



キム・チボク長老事件

1982 年、教会にいわゆる「キム・チボク長老事件」が起こった。キム・チボク長老は北朝鮮から越南する時、ハン・キョンジク牧師をおぶって下京した立志伝中の人だ。その方が肝臓癌で死に瀕していた。その時、小説家ファン・スンウォン先生夫婦が、私たちの教会に出席していたのだが、彼と姻戚関係だった。ある日、ファン先生夫人ヤン・ジョンギル勸士がチョウ・ヨンギ

牧師を尋ねてきて哀願した。

「先生！私たちの親戚が死に瀕しています。お祈りをお願いします。」

チョウ牧師は、この頼みを丁重に断った。

「ヨンラク教会の担任牧師に祈りを受けるようにしてください。私が教会と教団が違う長老に按手祈禱をしたら、大きな困難にぶつかるかもしれません。」

しかし、ヤン勸士は願いを取り下げなかった。

「人が死にそうなのに、教会が違うからと、主のしもべが祈ってあげられないというのは理解ができません。さらにその人は私の親戚（姻戚）です。必ず祈ってください。」

結局、チョウ・ヨンギ牧師は肝臓癌末期であるキム長老に按手祈禱をした。キム長老は祈りを受けた後に感謝献金を捧げて、チョウ牧師は感謝献金を教会の経理局に送った。しかし問題はとんでもない所から発生した。動くことができなかったキム長老が祈りを受けた後、病床から起き上がったのだ。そして何日も生きられないと医者から余命宣告を受け、横になっていたキム長老の病状は急速に回復して、そこから起き上がるようになり、その後退院した。

キム長老は非常に喜びながら知人にこの事を知らせ、オサンリ祈禱院で断食祈禱を始めた。元々肝臓癌患者は高たんぱくな栄養食を摂取する必要があるが、断食をしたため体調が再び急激に悪くなり、結局は召天されてしまった。この事により家族は、天国に行くであろう老人に苦労までさせて亡くならせた、とチョウ牧師を非難した。

葬式を行うとお金をもらって神癒祈りをしてあげたのだと悪

い噂が広まった。結局この知らせは、ヨンラク教会の担任牧師の耳に入り、これを問題として大韓イエス教長老教会（統合）総会は「チョウ牧師をカルトに準じる。今後、チョウ牧師とどのような交流も禁ずる。」という決定が下された。それ以降10年間、チョウ牧師はカルトという烙印を押されたまま、教界から外されて、辛く難しい時間を過ごさなければならなかった。

異端性から抜け出した日

いわゆる「キム・チボク長老事件」から10年後、大韓イエス教長老教会（統合）のチェ某牧師が、チョウ牧師の終末論、神癒、異言、奇跡などの神学を問題として再び異端性を提起した。

牧会者の神学を問題として異端性を提起する、それは韓国の教界では緋文字のように致命的だ。まさにそのような複雑な状況の中で私はチョウ牧師の帰任命令を受けた。約8年間の米国での牧会を下ろし、ヨイド純福音教会に復帰し、国際神学研究院長を任された。その時私は、モルデカイが、いどこであるエステルに言った言葉が浮かんた。

「あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」（エステル4:14）

私はその時までヨイド純福音教会とチョウ・ヨンギ牧師の祈りと後援で米国に留学して神学を勉強した。このすべての事は、今この時のためであったかもしれない。今は、使命感を持ち、五旬節神学の偉大性を多くの人々に伝えなければならない。私はアハシュエロス王の前に立つエステルの心境で祈った。

当時、おじのイ・キョンジュン牧師が統合側の釜山洞老会長と宣教部長として在職していたので多くの諮問を求めた。私は

おじから統合側の教会の住所録を貰い、「ヨイド純福音教会の信仰と神学」2巻を執筆し、統合側の教会の担任牧師 7000 名全員に送った。そして韓国教会超教派牧会者 3000 名にもこの本を送った。

統合側のカルト調査委員たちにはチョウ・ヨンギ牧師の著書 30 巻を送り、学者的良心と信仰で問題点を指摘してほしいと要請した。しかし、調査委員らが 1 年間、チョウ牧師の著書をすべて読み、説教を分析してどのような調査をしても問題を発見することはできなかった。結局、調査委員たちは次のような結論をくだした。

「研究、検討した結果、問題についてすべての内容は、我々長老教会と違う五旬節信仰と神学の特性に寄与するものである。異端嫌疑は無い。」

結局、1993 年に希望教会で開かれた統合総会で、チョウ牧師に被せられた異端性嫌疑が完全に取り除かれた。事実、この問題が解決する前に、神様の導きがあった。総会前、調査委員長ハン・ワンソク牧師（後に統合総会長となる）と委員会総務、そしてチョウ・ヨンギ牧師と私は、ヨイド 63 ビルでお会いした。ハン牧師は慎重に口を開いた。

「研究結果がすべて出ました。次週総会で発表します。結論は『嫌疑無し』でした。しかし長老教統合側で異端視された個人や教会に異端嫌疑無しとした前例はありません。しかし、私たちはチョウ・ヨンギ牧師とヨイド純福音教会に対して何の問題も無いと公表しようとしています。その代わり、謝罪文を一筆書いてください。」

「どのような内容ですか。」

「この間、教会リバイバルにだけ力を注いでいたため、本人が韓国教会との疎通がうまく取れず誤解を生んだが、今、韓国教会の霊的指導を受けて、韓国教会のリバイバルのために努めていくという内容であれば良いです。」

チョウ牧師は、ハン牧師の要請を快く受諾し、その場でハン牧師が言った内容をすべて書き、サインした後に渡された。実際総会の現場では異端性解除を阻止するために決死隊が構成されていたそう。しかし彼らが、夕食に出て会議場に戻らずにホテルに戻り休んでいたため、再開された会議でこの案件が通過された。ハン・ワンソク牧師に対する感謝の念は今も忘れない。

大型教会の牧師は、社会の低い暗い場所を見回すという機会を持つのが難しい。そのため一月に一度は必ず大変な暮らしをしている教会員の家庭を訪問している。ソウル駅前にある宿泊所に住む家庭を訪問したことがある。2 畳にもならない小さな部屋が、廊下づたいに数十戸ずつあった。ソウルのビル街の間にこのような場所があるとは想像もできなかった。ここには主に独居老人 750 世帯が住んでいるという。私は、体が腫れて痛く、仕事もできずに休んでいる方と一緒に礼拝を捧げた。礼拝後、国からどのような補助を受けているか聞いてみた。

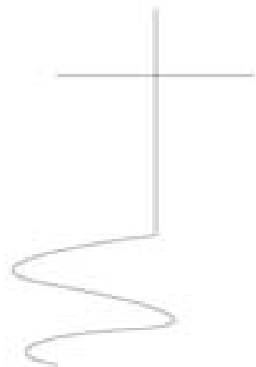
「息子と連絡が取れず長くなるが、息子の名前で田舎に家と土地があり、医療と福祉恵沢を受けられずにいます。しかし私は主日に教会に行くのが唯一の楽しみです。」

希望が見えない絶望の場所でも、主だけを見上げて信仰で日々を過ごしておられるその方の姿は、誠に尊く感じた。†



キム・ヒョンチョル

前モクサン教会、前担任牧師
(社) プロライフ顧問



宗教家から信仰人へ

1954 年、私は母の胎内にいたときから教会に出席した。私の意志とは関係なく、そこにいたのだ。母胎にいるときからの信仰者ではなく、母胎にいるときから教会の出席者だったと言うのが正しい。1956 年には幼児洗礼を受けたと聞いた。自らの経験から信仰を得たのではなく、洗礼を受けたと聞かされてキリスト教という意識を得た。幼い頃から、すべてキリスト教に囲まれていた。幼稚園も教会が経営する幼稚園で、ハングルも主の祈りを書き写すことで学び始めた。初めて習った歌も賛美だった。

小学生、中高生をいわゆる「チャーチボーイ (church boy)」として過ごした。教会学校の行事だけでなく、大人の行事にも欠席することなく、両親と一緒に参加した。聖書クイズや賛美コンテストではいつも受賞者の一人だった。中学生の時から役員として頭角を現す模範的な少年だった。

しかし、大学に入学してから悩みができた。今まで教会で聞いたことと違うことを聞き、私とは違う考えで暮す人がもっと多いということを知ったのだ。当時は、愚かな考えをもった。「世の中と歩調を合わせても信仰生活ができる。」 そんなはずがない。だが愚かにも、どちらかを選択せねばならなくなるとは思わなかった。名門高校を卒業し名門大学に通ったので、将来は保証されていた。ところが、心の底から生じた質問の答えが見つからなかった。「自分はどこから来てどこへ行く誰なのか？」答えを見つけられないと人生の意味が見いだせない。いくら世の中で偉くなっていい職場に就職し大学教授になったとしても、



その人生になんの意味があるのか。

1980年11月16日、友達の提案でソウルのチンレイ教会を訪問することになった。「われわれが過ごす毎日、そして人生の意味と目的が何なのかについて悩んでいるなら、まず、イー・ドンウォン牧師という方の説教を一度聞いてみよう」と提案されたのだ。初めて訪れる所なので遅刻してしまい、説教の途中から聞いた。

その日の説教は、キリスト人の成長に関するものだった。説教の中に神様という単語が出た。その言葉が聞こえるたびに、誰かが胸を叩くような衝撃を受けた。そして、説教者の後ろにある白い壁に点一つが刻まれているのを幻想のように見た。その大きな壁に刻まれた一つの点を幻影のように見て、自分が神様をそれほど大事に思っていなかったことを悟った。悔い改めの涙があふれ出て、抑えきれなかった。「ごめんなさい」という言葉が繰り返し出てきた。私は生まれてから一度も神様の存在を否定したことがない。キリスト教の中で育ったため、神様の存在は当たり前のものだった。幼い頃に空を見上げ、秩序を設計した方がいなければ宇宙は運営できないと考えた。大きくなって原子核工学を専攻してからも、科学的にも神様は存在するのが当然だと思っていた。

ではなぜ急に悔い改めたのか。もし私が神様の存在を認めていなければ、その時は何も起こらなかったであろう。だが、神様の存在を認めていたからこそ、逆に痛恨の悔いがあった。まるで私を産んでくれた両親を20年余り面倒も見ずほったらかして、自由に過ごしたのと同じ気持ちだった。その間、存在すると信じていた神様を、自分の人生には介入させなかったのだ。

私にとって「神様がいる」という考えは教理的な観念にすぎず、実際や現実ではなかった。誰でも大統領の名前は知っているが、「今朝、その方があなたに何と話しかけたのか」と尋ねられて答えられる人は何人もいない。大統領の存在を知っていることと大統領に会って一緒に過ごすことは、大違いなのだ。

悔い改めると、幼い頃から聞いてきたイエスの十字架事件が、ようやく私のための事件として受け止められるようになった。26年教会生活を過ごした末に、ようやく復活したイエス様を体験し、その方を人生の神様として受け入れたのだ。私は神様を認めながら神様とは無縁に生きてきたからこそ罪人です。あえて神様を追い出して私が主人になりすましていたことを悔い改めますから、許してください。私の人生の主権を元通りにあなたにお返しします。私の代わりに十字架にかけられて復活したイエスこそ、私の人生の主人です。

私を創造される時に計画された通り、私の人生を作ってください。これが私の信仰告白だった。人生をあきらめなくなるほど私を苦しめた質問——「私はどこから来てどこへ行く誰なのか」——に対する答えを見つけたのだ。キリスト教の宗教家から神様と同行する信仰者に転向した。イエス様を信じて私の人生にどんなプラスがあったか？ イエス様を信じるということは、人生にプラスになるのか、マイナスになるのか、損益の問題ではない。All or nothing、生か死かの問題である。

霊的タイムラインで表現するなら、私の65年間の教会生活のうち、初めの26年間は「教会堂内の不信者」として過ごした。「信者」として過ごすようになってから39年経つ。このような事例

は、新約聖書の中にも見つけることができる。ニコデモがそうであり、パウルがそうであった。個人的にチョ・ジョンミン牧師に会って交わりしたことはなかったが、彼の本を読むと宗教と信仰を区分することができ、私のような経験があったと推測できる。「世界はキリスト教を宗教という枠組みで理解しようとするが、イエスに出会った人はイエスが宗教ではないことを知っています。イエスに会った人は人生が揺さぶられる経験をします。」キリスト教が宗教であるならば、仏教徒であった彼が敢えて文化様式を変えてキリスト教に乗り換える必要はなかっただろう。読者の中で私の証を読んで自分が宗教家に留まっている状態だと感じたなら、救いの福音を真剣に聞き、信仰人になることを祈る。

私は、イエス様に会う前にも聖書をたくさん読み、多くの情報を知っていた。しかし、知っていることを誰に伝えることもできなかった。一方、イエス様を信じた後は、誰に言われなくても伝えたくなり、伝えることができる。なぜなら、経験があるからこそ、ありのままの証さえすればいいからだ。私が体験したイエス様を証言する時、聴く人が復活したイエス様の存在を体験し、イエス様を信じる奇跡的なでき事が相次いだ。これまで、救いの福音を何人に伝えたのか、その数は数えていないが、数千人に至るだろう。

以前は、聖書にどのような内容が記されているか尋ねられて知識で説明していたが、一人もイエス様の道へ案内したことがなかった。しかし私が証人として証するようになると、多くの人々がイエス様の前にひざまずき改心した。宗教家から信仰者

に変わったのは、神様の子供という身分を得たことを意味し、キリスト教の知識人から証人へと変わったのは身分相応の人生を得たことを意味する。 私には、教会の中にいながら救いの福音を聞けず、何が罪であり、何が悔い改めであり、何を信じなければならず、何が救いなのかを知らず、キリスト教徒であることだけを知っていたという過去がある。そのせいか、私が伝道する人の中には牧師、宣教師、長老、執事が特に多い。今まで伝道して、イエス様を信じた人のうち、45% はすでに長い間教会生活をした人たちだった。

牧師としての召命を受けた時、神様に祈った。「神様、牧師になると忙しくて、普通の信者でいた時より、一对一の伝道をする時間がなくなるのではないかと心配です。一对一の伝道できないで過ごす年がないようにしてください。」この祈りをして30年が過ぎたが、ありがたくもいつも証人の人生ができるように神様が人を紹介してくれた。韓国で伝道対象者に会えなければ中央アジアで、中国で、米国で証言する機会が与えられた。聖書に「この私が福音によって…あなたがたを生んだのです」(第一コリント4:15)とあるように、福音によって教会共同体が形成され、さらに孫、曾孫などへと広がっていく。青年時代に「私はどこから来たどこへ行く誰なのか」という問いに悩んだが、今、私はこう答えられる。「このように神様の仕事をする人生になると誰が想像できたでしょうか。神様、ありがとうございます。すぐお目にかかります。」†



チン・ミョンスク
愛の手宣教会牧師



主がおぶって導かれる道

私は弱いが主は強い、私は何も持ってなくても、主は満たしてくださった。同労者も、経済も、牧会の方法も……。私の心に願いを起こさせて働いてくださった主を賛美し証する。私が歩んだ道ではなく、主が私をおぶって導かれた道だ。

「わたしたちが患難に会うなら、それはあなたがたの慰めと救（すくい）とのためであり、慰めを受けるなら、それはあなたがたの慰めのためであって、その慰めは、わたしたちが受けているのと同じ苦難に耐えさせる力となるのである。」（Ⅱコリント 1:6）。私の人生に患難と慰め

を同時に経験する時に与えられた御言葉だ。その夜、私は「疎外された人たちのために仕えます」と祈った。

神様の御業を体験して、私は神学校に入った。ある日、顔も知らない私に、セムンアン教会の女性宣教会から、一カ月に3万ウォンずつ、一年分まとめて36万ウォンの交通費を出してくれるという連絡を受けた。35万ウォンが必要で、主に祈った次の日にこういう恵みを経験した。今もあの時のことを証しつつ感謝している。

牧会の訓練を受けた後、1992年5月に未自立教会に仕える「愛の手宣教会」をつくり活動し始めた。経済的に支援してくださる方々が、信仰界、国民日報、クットン放送などを通じて志願して参加してくださった。おかげで、数百か所の小さな教会を訪問し交わりを持ち、彼らの真率な証も聞いた。その証を会誌に載せて恵みを分かち合っている。会誌名を「サモ行伝」とし、その年の7月から出刊するようになり、多くの方々の愛を受けている。ある牧会者のサモニム（奥様）の告白である。



「この世で暖かくて貴重な最高の贈り物をいただきました。平穩な気持ちで、初めて私の母を訪ね、聖書を買ってあげました。食事も作ってあげました。リンゴのの中の種は目で見ることができますが、その種が地に植えられた時、どれほど多くの実を結ぶかはわかりません。愛の手の支援がまさにそのようなものですね。」

8 年前（2011 年）から、牧会者たちと文通による働きへと、状況が展開された。神様のサイン（聖書を買ってあげる夢）の前に、女性牧会者として男性牧会者に仕えることは、容易ではない。4 カ月間迷い迷って、霊的共感を持ちやすい読書パートナーになることから始めることにした。まず読み、感動を受けた本を買って送ってあげる。——この『図書分け合い』を通して、牧会者たちの人生と働きに直接的かつ間接的に影響を及ぼした、という体験文が殆どだった。

「愛の手宣教会から、＜あなたは私を愛するか？＞と＜私は死に、イエスによって生きる人＞（ユ・キソン牧師著）の本を送ってもらいました。おそらく、二冊の本を 20 回以上は読んだと思います。毎日、イエス様の恵みで幸せに暮すことができ感謝します、と告白しています。」

「牧師先生とサモニムに対する不平不満が絶えなかった他教会の勸士さんがいます。送ってくださった＜感謝＞という本の内容を話しました。そして、感謝の祈りを捧げるように薦めました。すると 3 カ月ほど経て、今やその勸士さんの唇から不平不満がなくなりました。」

また、伝道関係の本を選んで送ってあげた方からの証である。

「二冊の本を読んで金曜祈祷会に出て、『神様！私も福音を伝え恵みを分かち合いたいです。私にも勇気を与えてください』と、涙ながらに祈りました。するとその週に、四か所から福音を伝えてほしいという依頼を受けました。」

私は、伝道に関する品々も用意して支援した。品物一つひとつに、伝道のためのコメントを書いて、中に入れて包装して送った。ある教会では、この品物を受け取りメモを読んだ人の中で、10 人も教会に出席するようになったという。販売はしていないが、牧会者たちが喜んで受け取ってくださり、私たちの働きが多く教会で実を結んでいることを手紙に書いて送ってくださるので、やりがいを感じる。

小さな教会への神様の慰め

枯渇しやすい牧会者たちのために、主と親密感を体験した私の「散策の祈祷」を薦めた。雅歌書を見ると、愛する者を様々な場所に導かれる光景が目につく。

『岩の裂け目、がけの隠れ場、その園、良い香りを放つ香料の花壇、谷、くるみの園へ下っていった……』ダビデは、主が自身を「緑の牧場、憩いの水のほとり」へ導かれると告白する。散策祈祷は、イエス様も弟子たちに「空の鳥、野に咲く花」を通して視聴教育をされた、恵みの手段であると信じている。この薦めを受け入れ、臨床実験を十分にされた牧会者たちの証が続いている。

「散策祈祷は、私にとって方法論ではなく、主のおられる所へ入りなさいという御声でした。私が入れるならば、主は食卓を備えて私を迎えてくださいます。」

「辛いと不平不満ばかり言っていた私を回復してくださいました。散策祈禱を学んだ通りに実践してみると、説教が知識ではなく感動の伝達に変わりました。また祈りも変わりました。私の 21 世紀の牧会への、まことの方向設定ではないかと思います。」

多くの教会で散策祈禱と霊性日記を書く聖徒たちが増えてきた。礼拝のたびに、聖徒たちと共に『イエス様、愛します』を告白したら、喜びが湧き上がり力強い礼拝雰囲気変わった、という牧会者もいた。

散策祈禱を融合させて伝道旅行を計画した教会もあるという。「移動中に車の中で、自然と対話の時間が多くなりました。花を見て感嘆し、『この花は誰がお造りになったのでしょうか？』『あの空は誰が造ったのでしょうか？』としながら、神様を伝えました。」

支援してくださる方々から頂いた献金で、毎月支援金を小さな教会に伝達しているが、「霊的な渇きは、推薦図書と散策祈禱を通して主と交わりながら力を得るようになりました。肉の貧しさは、まるで神様がエリヤに送られた『焼け石の上で焼いたパン一個と、一びんの水』のように、愛の手宣教会からの支援を通して、毎月満たしてくださいました」という話も聞いた。

主がお受けになる貴重なこの告白を、月刊小冊子に綴るようになったが、いつのまにか 321 冊にもなった。「霊的な貯蓄通帳だ」と思い、支援してくださった多くの方々と共有している。この小冊子を伝道に用いる教会もあるという。長い間、主から離れていたある魂が感動を受けて、「良きサマリヤ人たちが書いた文集のようだ」と言って、教会に出席するようになったという。

最近私は、「あなたは必ず国のうちにいるあなたの兄弟の乏しい者と、貧しい者とに、手を開かなければならない」（申命記 15:11）という御言葉に従順するため、一つのことを行動に移し始めた。毎週、周辺にある小さな教会だけを訪ね、共に礼拝を捧げることだ。劣悪な環境ではあるが、御言葉に満たされて恵みを受けて帰って来る。

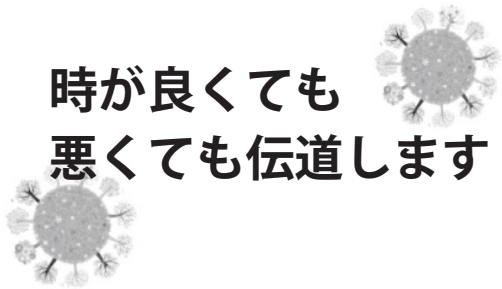
イザヤ書 55 章 2 節の御言葉である。「なぜ、あなたがたは、かてにもならぬもののために金を費し、飽きることもできぬもののために労するのか。わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で、自分を楽ませることができる。」

まことの食物、満足させてくれる食物、たましいを養ってくれる食物は何だろうか。ケンカーヤー牧師の文から答えを得る。「主との交わりこそ、人生における最高の晩餐だ。そして事実上、それは食事のメインコースになる。」

私の魂が御言葉と祈りによって継続してリモデリングされる時、良質の食物が提供されていることを忘れない。キリスト・イエスの心を抱き、主にならって従っていく聖なる者たちの献身を、主がすべて覚えてくださり、祝福された人生へと導いてくださるように祈っている。

最後に、主がおぶって導かれる小さな教会の牧会者夫妻に、この御言葉をもって慰めたい。「あなたがわれらを苦しめられた多くの日と、われらが災にあった多くの年とに比べて、われらを楽しませてください。」（詩篇 90:15）†

時が良くても 悪くても伝道します



私は、神学校を通いながら水源（スウォン）での伝道セミナーに参加し、伝道の訓練を受けました。一般信徒の時から仕事をしながらトラクトを配り福音を伝え、夜、仕事を終え家に帰る前には、教会で神様に祈りをささげる日々を送り、福音を伝えることを喜びに思っていました。そのうち、仕事が1日か2日休みになると、全国津々浦々を巡回して福音を伝える中、神様は貴重な信仰の同志に出会う祝福を与えてくださいました。

水原に引っ越し後、礼拝をささげる幕屋について祈り、1997年10月17日、伝道セミナーで出会った方を通し、教会が始まりました。その時、「使徒行伝の初代教会の姿の教会を立ち上げよ」というビジョンが与えられ、教会名を初代教会と名付けました。その後、鳥山に教会を移転、12年間仕えています。

ある日、仕える準備のために、全能なる神様が導かれる御手が働かれる事を願い、ひれ伏して祈っていました。すると、済州島（チェジュド）西帰浦（ソギポ）に住むある勸士様から「牧師先生、大したものではありませんが、お年寄りの方々のために、仕えることにお使いください。」と電話がありました。神様はひれ伏している小さき者を見ておられることを感じました。

また、ある日は、仁川（インチョン）銅岩（トンアム）駅で

生活苦のため昼間はタクシー運転手をされている牧師先生から連絡がありました。連絡を下さった牧師先生も大変な状況でありながら、「数日前、ある方から十分の一献金を受けましたが、ずっと牧師先生のことが心に浮かびます。この物質を牧師先生にお届け下さいという神様の御心のようです。」

また、何年前かニュースでも報道されましたが、貯水池に落ちた息子を救おうとした父親と長男が溺死してしまった悲しい事件がありました。ある日突然、未亡人となり長男も失ってしまった悲痛な状況でした。その女性とは面識はなかったのですが電話で相談を受け祈りました。彼女は、葬儀のお花料から十分の一を捧げたいと申し出がありました。私は、彼女のその手をどうすることもできない気持ちで、しばらく空を眺めるだけでした。ただ、神様から与えられた仕える心、慰める心を受けて、私はひざまずいて祈るだけでした。全ての主、完全なる神の御手が働いておられたことを告白し、主に栄光を帰します。

誰もいない教会での祈り

聖徒たちが離れ、誰もいない聖殿で、一人礼拝をささげた早天礼拝のことを今でも覚えています。牧師として失敗し途方に暮れていました。その時、ある聖徒の方が伝えてくれた話が、その後の働き of 大きな転換点となりました。

20世紀の初め、日本に長尾巻という牧師先生がいました。金沢という所でテントを張り、妻と子供と創立礼拝を捧げました。その地は迷信が強く、5年間、聖徒が一人も来ない中、貧困と迫害の苦しみに耐え愛を実践した牧師先生です。ある夜の礼拝の時、いよいよ最初の聖徒となる一人の青年が現れました。その瞬間、長尾牧師先生は感激の心で普段よりも情熱的にメッセージを語りました。その青年と食事をする中、青年が血の塊を吐き、

結核患者であることを知りました。

当時、結核は死に至る病、感染の危険性があったのですが、長尾牧師先生は「この青年は、主が私に初めて送ってくださった人だ」という確信をもち、吐血する青年を限らない愛で看病しました。

この時、青年は、長尾牧師先生を通し「信仰はすなわち愛である。そして愛は言葉ではなく実践すること」であることを学びます。どうせ死ぬのなら、自分も愛を実践して死のうと決断し、スラム街を訪ね、貧しい人を助ける働きをしました。すると、驚くべきことに結核が治ったのです。青年は、自分が死の危機に瀕したとき、キリストの真の愛を見せてくれた長尾牧師先生の生き方に受け継ぎ、スラム街を離れることなく生活しました。そして、青年は神学生になり牧師となりました。後に 20 世紀の聖人と呼ばれる賀川豊彦牧師です。

敗戦後、海外にいた多くの日本人が殺されました。しかし、日本軍による被害が最も大きかった中国に居住していた日本人は、200 万人もの人が無事に帰国することができました。さらに重要なこととして、日本を分断しようとした連合国の当初の計画は中止になりました。賀川牧師先生の生き方を尊敬していた中国の蒋介石総統が、賀川牧師という日本人 1 人のために、200 万人の日本人を無事に帰還させ、日本の分断に積極的に反対したといわれています。蒋介石総統は「日本人は我が国の敵である。だが、今日も賀川先生が熱い涙をもってこの中国のために祈ってくれていることを思うと、日本を憎み切ることはできない。」と言ったと伝えられています。

三浦綾子さんは「天の梯子」という著書の中で、賀川豊彦牧師先生だけでなく、5 年間もの間、絶望せずに祈り続けた長尾

牧師先生の存在の大きさを力説している。

長尾牧師先生は、どのような状況にも落胆せず、最後まで神様が示された場所を守った方です。5 年間も誰一人来なかった教会、世の中では失敗した牧師と呼ばれるかもしれません。しかし、神様はどのような評価を下されるのでしょうか？私も聖徒が去ってしまい落ち込みました。しかし、私よりも先に、誰かが孤独なこの道を歩いています。その中で最も模範となるのはイエス様です。今日、私は神様が与えてくださった使命を誠実に担っていけば、必ず実が結ばれることを信じています。

聖殿で祈りを捧げていると、上の階から誰かがドンドン飛び跳ね、世的な音楽が鳴り響きます。私は、より大きな声で「主よ！」を叫び祈ります。教会の上の階は、エアロビクスなどのスポーツセンターになっているのです。家賃の値上げなど、去年は精神的に大変な年でした。現在、教会の敷地を祈り求めています。周囲を気にせず、存分に礼拝を捧げ伝道し、仕えることができる環境を開いてくださるよう切に祈ります。

20 年間続けている働きに、週に 1 度（現在は月曜日）ソウル弘大にある極東（クックドン）放送局で電話相談をしています。様々な方々の事情を受話器越しに聞きながら祈り、相談者が聖霊による御言葉と祈りに触れて、回復される御業を体験しています。

今日も伝道用乾パンを詰め込んだバックを持ち、市場に、タクシー乗り場に、人がいるところ、どこにでも、神様が切に探しておられる魂を探しに出かけます。時には「乾パン牧師」と言われながら…。

「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。」（Ⅱテモテ 4：2）。†



聖母マリヤは、カトリック教会が言うように、生涯処女でしたか？

ローマ・カトリックは聖母マリヤが一生処女だったと主張するが、問題はその教理を支える聖書的根拠が全くないことだ。マタイの福音書 13 章 55~56 節には「…この人は大工、母はマリヤといい、兄弟たちは、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。 またその姉妹たちもみな、わたしたちと一緒にいるではないか…」と記してあるので、マリヤの生涯処女説に聖書的根拠はないと言える。マリヤは生涯処女だったという教理は、教会が信じるべき教理としてピウス 9 世が 1854 年 12 月 8 日に宣言されてからローマ・カトリックの教理として確定された。

そして、「聖母マリヤは生涯処女として生き、天にあげられた」と、1950 年 11 月 1 日にピウス 12 世が教会の信じるべき教理として公式宣言した。そして、聖母昇天日は 8 月 15 日に確定した。東方正教会では、昇天 (Ascension) ということ言葉を使わずに、

聖母被昇天 (Assumption) という言葉を使う。ここで問題になる事は、新教とは聖書が示すもの以外は受け入れないが、ローマ・カトリック教会は教皇無誤説の故に新教とは違う無数の教理を作り上げ、これから先も作り上げて行くと思われる。

多くの矛盾の中、聖書だけが真理

私たちがよく知っているように新教がガリレイの地動説を受け入れたことに反して、ローマ・カトリック教会は天動説を主張した。それは、いわゆる無誤と言われる教皇がそのように主張したからだった。しかし、346 年が経ってから誤ちを認め、ヨハンパオロ 2 世がガリレイの名誉を取り戻してくれた。それだけではなく、ジャンヌ・ダルクは 1431 年宗教裁判で魔女とされてフランス・ルーアンで火刑に処されたが、1920 年教皇ベネディクト 15 世によって聖ジャンヌ・ダルクは聖者として称えられた。

ならば、なぜローマ・カトリック教会はマリヤの生涯処女説と聖母被昇天を主張するのか？

2つの理由がある。第一に、聖母マリヤが御子の栄光に参加したと主張するためである。第二は、聖母マリヤが神に完全に受け入れられたと主張するためだ。だから、新教では聖母マリヤに関する言及がないことに反して、ローマ・カトリックからは神の次にマリヤを愛して崇めている。重要なのはカトリック教会ではマリヤを賛美と祈りの対象とまで神格化させている問題だ。

つまり、私たちは聖書が「是」というところには行くが、「非」というところに行ってはならない。なぜならば、教皇も牧師と同じように一人の人間だからである。偉大なことを成した人間を尊敬する事はあっても、崇拝することがあってはならないからだ。†



韓国とイスラエルは ひとつの家族に なるでしょう

ソル・ウンス牧師〔ソウルジュヨングァン（ソウル主の栄光）教会行政牧師〕は、韓国とイスラエルの架け橋となる「イスラエル専門家」である。イスラエルに帰って来るユダヤ人（アリーヤ）を助ける働きを始めて7年になる。「アリーヤ（Aliyah）」とは、モーセ、イザヤ、エゼキエルの預言にあるように、全世界に離散したユダヤ人が故郷イスラエルに帰還し、定着することを意味するヘブル語である。また、北朝鮮への送還の危機に瀕している中国にいる脱北者を、韓国に入国させる「北朝鮮版アリーヤ運動」も併せて展開している。

ソル・ウンス牧師がイスラエルに関心を持つようになったのは、ある日、説教を準備する際に受けた神の感動のゆえであった。

「神様が私の心に、『あなたが準備した説教をせず、イスラエルについて説教をしなさい』と、御声を聞かせてくださいました。当時、北朝鮮のために熱心に祈っていました。『イスラエル

は、あなたにとってさほど重要ではないとしても、わたしにとっては重要なのだ』という感動が与えられたのです。主が関心を寄せておられることなら、私も関心を持とうと思いました。詩篇 122 篇 6 節の御言葉——エルサレムのために平安を祈れ、エルサレムを愛する者は栄え——を本文に、イスラエルに対するヴィジョンを宣言しました。」

一度もイスラエルに行ったことも、また深く考えたこともなかったソル牧師だったが、説教の時、神から与えられた感動を聖徒たちと分かち合った。

『我々の教会がイスラエルを祝福する教会になります。エルサレムでカンファレンスを開催し、皆さんはイスラエルの地を踏むでしょう』と宣言しました。その時に宣言した内容は、5年ですべて成就したのです。」

彼は 2013 年、初めて聖徒たちと共にイスラエル聖地巡礼に旅立った。

「発つ前に、イスラエルに関して知っておかなければと思い、関連書籍を探そうと教会の書庫へと向かいましたら、床に一冊の本が落ちていました。＜イスラエルに向けられた父の心＞という本でした。飛行機の中で本を読み進めるうちに、私の内にユダヤ人に対する否定的な考えがあることに気づいたのです。ユダヤ人がイエス様を殺したのではなく、私たちの罪が主を殺めたことを悟りました。今まで、ユダヤ人にその罪を転嫁して、責任を回避してきたのです。イスラエルに到着した後、祈りの家で礼拝を捧げました。この時、『わたしはとても嬉しい』という主の御声が心に響きました。」

ソル牧師は、イスラエルに定着しているユダヤ人の中で、ユダヤ教を信じないことで迫害され、政府の支援も受けられない

人たちに会った。イザヤ 49 章 22 節の御言葉——彼らはそのふところにあなたの子らを携え、その肩にあなたの娘たちを載せて来る——を読み、彼らを助けようと決心した。海外に居住するユダヤ人を帰還させる働きは、聖書に預言されていることであり、世界中に離散したユダヤ人を呼び集めてシオンに帰還させるという御言葉が成就することである（申命 30:3、イザヤ 11:11～12；43:4～7、エレミヤ 16:14～15；23:3、エゼキエル 34:11～15；39:28、ゼカリヤ 8:4～8）

エチオピアのユダヤ人

イスラエルを訪問した後、ソル牧師の働きは「北朝鮮の脱北者救助ならびにイスラエルへのユダヤ人帰還運動」が両軸となる。

「担任牧師である父に、アリーヤ運動について説明しました。そして、再びイスラエルを訪問しました。私が行く旅程において、父と共に様々な人に出会い、共に礼拝を捧げました。その度に聖霊様が強くご臨在されました。以来、父もロシアに残されたユダヤ人を帰還させる働きを始めたのです。そして、エチオピ



アのユダヤ人のために、はるばるアフリカまで 10 回も足を運んだのです。今では、私よりも熱心にこの働きに携わっています。」

ユダヤ人帰還使役を始めてまもなく、イスラエルに対する神の御心を悟る出来事が、ソル牧師一家に起きた。ある日突然、3 人兄弟の一番上の姉がウイルスに感染し、3 時間後には死ぬという知らせが届いた。

「セブランス病院に行ってみると、姉はまさに死にかけていました。担任牧師の娘が危篤状態であると知り、教会では聖徒が祈り会に集まってきました。父は子どものように泣きながら、『どうか娘を生かしてください』と祈りました。私は『神の御心をお示してください』と祈りました。」

その出来事は、70 人の聖徒たちがイスラエル聖地巡礼に旅立つ、一週間前のことであった。神はソル牧師に、『主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である』という、出エジプト記 4 章 22 節の御言葉を与えてくださった。ようやく彼は、この状況を理解することができた。

「神様は私に質問なさいました。『わたしの子どもには国がなく、2 千年も流浪し、数百人が殺害され、今もお迫害されている。わたしの胸は痛い。あなたには彼らに対するわたし同様の心があるのか？』——しかし、私にはそのような心はなかったのです。彼らはただ宣教の対象であり、御言葉に記されているから宣教したにすぎませんでした。私は、神の愛のない働きをしていることに気づいたのです。そして祈りました。『主よ、これからは主の心を持ちます。単なる宣教の対象ではなく、父の心をもって彼らを顧みます。どうぞ姉をお助けください』と。」

彼の姉は奇跡的に生き返った。3 時間しかもたないと言われたが、その 1 時間前に目を覚ました。

「私にとって、その 1 時間は、私に残されたイスラエルを助け

る時間のように感じました。もはや霊的なゴールデンタイムは、あまり残されていないという意味に思えてきました。私は戦略を練り、素晴らしい法人も作り、宣教を効果的にしたいと思っていたのですが、神様は「もたもたせずに、あなたができることを今しなさい」という心を与えてくださったのです。」

神の御心を知ったソル牧師は、本格的にイスラエル宣教を始めるようになる。

「私は特別に、エチオピアのユダヤ人に関心を注いでいました。彼らは、世界で最もひどい迫害を受けています。エチオピアには10万人が暮らしていますが、その中で、イエス様を救い主として受け入れ信じているメシアニックユダヤ人は、1万2千人ほどです。彼らは、首都アディスアベバにあるイスラエル大使館の付近に集まって住んでいます。本国帰還の緊急連絡がいつ来るのかわからないので、常に大使館周辺で待機しているのです。エチオピアにいるメシアニックユダヤ人は、イエス様を信じていることで、より大きな迫害を受けているのです。私たちは、彼らがイスラエルに帰還する日まで、耐えて生きながらえるように、食糧を支給し井戸を掘る働きをして助けています。」

ビジネス宣教を始める

イスラエルでは、ソル牧師の働きは真実であると確認され、イスラエルアリーヤ運動を総括する機関である、ジューイッシュ・エージェンシー (Jewish Agency) のアジア代表に彼を選出した。

「ユダヤ人は、クリスチャンとは一緒に働かないのが一般的です。クリスチャンであり牧師である私をパートナーとして選んだのは、私を家族として認めてくれたという意味です。本当に有り難いことです。イスラエルも、徐々にではありますが変化

していると感じます。そして、イスラエル宣教に携わりながら、現地の方とのビジネスチャンスも与えられました。」



テルアビブ大学校の副総長であり、化粧品会社代表である方とつながりを持つようになった。彼は「ケドマ」というブランドの化粧品を韓国・中国・日本へ独占契約をするが、一緒に事業を始めないかと提案してきた。ソル牧師は祈った後、このビジネスの収益を通して、宣教活動をより拡張させようとする主の御心を悟り、事業を開始する。

「ケドマ製品はイスラエルで生産され、ヨーロッパやアメリカ、オーストラリア、台湾、シンガポールなど、50か国で販売されています。ヨーロッパでは有名ブランドとして知られています。死海のミネラルと天然成分を含んでおり、皮膚の再生を助け、肌を健康にしてくれます。2017年3月に事業を始めましたが、口コミで広がり、ラグジュアリー・スパや美容室で利用されています。この事業の収益は、イスラエルのアリーヤ運動ならびに中国にいる脱北者を助ける働きに充てられています。先日、イスラエルの大統領が韓国を訪問しました。また、韓国とイスラエルの間でF T Aが締結され、両国はより一層距離が近づきつつあります。ビジネスの領域にとどまらず、主が再臨なさる道を備える国として、韓国・イスラエル両国が用いられるよう祈っています。」 †

<文=キム・ソンホン記者、写真=スタジオタックスキム・イル>

「神様から与えられた自由を 必ず守り抜かなければ なりません」



現代版使徒パウロと呼ばれるイ・ジョンフン教授は回心前、キリスト教を敵視し、教会を倒すため韓国教会を宗教集団として迫害し、公立学校内の宗教活動禁止、公務員の宗教的中立強化、教会内の投票所設置反対などの主張を貫いた。また、学校内における宗教の自由を奪うため、ミッションスクールが公に広告することを非難した。しかし彼は劇的にイエス・キリストに出会い回心した後、韓国教会を保護し、同性愛やジェンダー・イデオロギーに陥った社会と教会を目覚めさせる役割を果たしている。イエスを信じる人たちを迫害したサウロが、生涯をかけて福音を宣べ伝えたパウロに変わったように、劇的に変化した彼の人生ストーリーを見てみよう。

イ・ジョンフン教授は今年の夏、国内外から数多くの講義要請を受け、多忙な日々を過ごした。講義しながら衝撃を受けたことが多かった、と彼は言う。



「今回多くのキリスト教の青少年に会いましたが、彼らはキリスト教の歴史に関心がなく、クリスチャンのアデンティティがどこにあるのかも知らず、どう生きて行けば良いのかもわからずに彷徨いながら、教会を批判的に見ていました。それで、次世代の目を覚ますことがいかに重要であるか、改めて実感するようになりました。」

彼は昨年、大韓民国の自由と成熟した市民社会、国際感覚を持つリーダーの輩出、法律や政策研究、多様な国際交流のための「エル政策研究院」を設立した。最近、エル政策研究院を通じて、PLI (Political Leadership Institute) 講義過程を開設し、オフライン四百人、オンライン一千人がこの講義を受講した。

「講義で重視したのは『現在私たちが享受している自由は、宗教改革から出発したものだ』ということです。『政教分離』というと、教会で政治の話をしてはいけないことだと思いがちですが、それは違います。むしろその反対で、政府が教会に介入できないようにするのが正教分離原則です。礼拝をこのように捧げなさい、牧会者はこのように立てなさい、こういう内容は説教してはいけない等、国家が干渉できないように憲法で政教分離法を作り、王であれ大統領であれ、誰も教会の自由に立ち入れないようにするためのものです。宗教の自由は、すなわち表現の自由です。出版の自由により聖書を、集会の自由により礼

拝を、法人設立の自由により教会を建てることができたのです。それほど自由は大切なものです。しかし現在の韓国では、このような自由が脅かされています。」

仏教に心酔した小学生

彼は仏教の家庭で生まれ育った。友人たちの招待で、町の教会に行ったことがあるが、聖書の話には訳もなく拒否感を覚えた。

「小学校4年生頃、母と書店に行ったことがあります。漫画以外の本なら買ってあげると母に言われ、私は『般若心経解説書』を選びました。母は私がふざけていると思ったようでしたが、真剣に読むからと言って買ってもらい、熱心に読みました。幼い時、仏教入門書も読みました。どういう訳か、仏教に関心が強かったのです。」

彼は、1993年東国（トングク）大学仏教学科に授業料全額免除の奨学生として入学した。大学2年の時、家族の反対を押し切って出家し、曹溪宗の代表門中に入り修行した。彼の目標は、大和尚になり仏になることだった。「人間はなぜ生きるのか」という根源的な質問を解決したかった。

「出家すれば大和尚が教えてくださると言われたが、教えてもらえませんでした。人生の根源的問題、苦痛の問題が解決されないで、懐疑心が押し寄せてきました。『私はどこから来てどこへ行くのか』——これが本当に知りたかったのです。」

出家すればすべてが解決できるような気がしたが、そうではなかった。彼は説法が上手いとよく言われた。「執着してはならない」と叫んでみたが、そうすればするほど執着する自分を発見した。1999年には、軍宗将校（軍法師）として任官し、軍生活を始めた。



「最近、私の反対陣営から、私が僧侶になったことがないと攻撃されますが、僧籍がなかったら軍法師にはなれません。牧師でない人が軍牧になれないのと同じです。これが最も強力な証拠です。現在私が出席している教会の担任牧師は、当時私と同じ部隊で少佐として軍牧を務めた人です。その人は部隊で教会を建て、私は軍法師として寺を建てました。今や担任牧師と聖徒として仲良くやっています。」

彼は、軍を除隊後に還俗した。空虚さが満たされないからであった。そうして彼は哲学という学問に出会うようになる。彼はその頃、人生に対する本質的な問題の答えを社会に投げかけ始めていて、社会の矛盾に憤りを感じていた。資本主義が嫌いだったし、社会主義哲学を学ぶようになってからは、教会はなくなるべき仇敵のように思えた。彼はその後、成均館（ソンギュンガン）大学を経て、ソウル大・法学大学院で法学博士の学位を取得した。

キリスト教抹殺政策を立てる

彼が宗教自由政策研究院で活動するようになったのは、博士

課程で学んでいた頃だった。彼は、ノンクリスチャンだったある教授の提案を受け入れ、宗教自由政策研究院で革新的な活動をしながら、教会を倒す研究を始めた。宗教自由政策研究院は、「宗教の自由も人権だ」というスローガンを掲げ、民事訴訟と立法請願、憲法訴願審判請求、陳情、申告などで、韓国教会を宗教集団として標的にした。高麗ウングンの「Jesus loves you」という広告版を除去し、公立学校における宗教活動禁止、公務員が特定の宗教を伝えられないようにする勧告条項挿入、ミッション・スクール内で礼拝参加を強要できないようにする等で、教会を迫害した。

「その当時、公の場で宣教するキリスト者を一掃するため、最初から処罰条項を入れようとしていました。今思えば、不幸中の幸いだったことは、勧告だけで終わったことです。もし法案に処罰条項を入れたなら、私は取り返しのつかない歴史上の犯罪者になるところでした。」

彼は2007年夏、心身の充電のためと、博士論文を仕上げるため、またキリスト教を精巧に攻撃するために、書籍を持って横城（フェンソン）付近の白雲寺（ペクンサ）という庵室に入った。彼は、キリスト教をより効果的に攻撃するために教会史を研究した。宗教改革史、韓国教会史、聖書を読んだ。そして、常にキリスト教放送を見たり聞いたりした。

ある日庵室で早天の仏参をし、食事を済まして勉強を始めようとすると、頭痛がしてきた。とても気持ちの悪い頭痛だった。しかし不思議なことに、寺から離れると頭痛がなくなった。

「深い山奥のため、電話をかけるためには車で20分ほど降りて行かなければなりませんでした。妻に会いたくて電話をかけると頭痛がなくなったのです。しかし再び寺に戻ると、またも頭痛が始まりました。妻と通話したから頭が痛くなくなったの



かな？と思ったのですが、寺から遠ざかれば遠ざかるほど頭がすっきりしてきました。」

彼は一カ月の予定で庵室に入ったが、結局、耐え切れずに半月で家に戻ることにになり、昼頃家に着いた。妻は「一カ月も我慢できずに戻ってきたか」と文句を言いながら昼食の準備をしようと厨房に立った。

ダマスコ途上のパウロのように

「いつものようにソファに座って、キリスト教のテレビ番組をつけました。中央聖潔教会ハン・キチュ牧師の説教を放送しており、罪に関する内容でした。私はその説教を聞きながら『牧師先生こそ実行してください！』と言おうとした瞬間、舌が固まり、あたかも雷に打たれたかのように前に倒れました。頭のとっぺんから足のつま先まで、自分が罪人だという悟りがあまりにも強く臨みました。その時、私は身体を動かせませんでした。『ああ、私はこのまま死ぬのか、罪人は抗弁もできずにこうして死んでいくのか』と思いました。神学書で読んだ『全面的墮落』とはこういうことなのか、と知りました。全身が、細胞1つ1つに至るまで罪に満ちている自分自身を見ました。イエス・キリストこそが罪人を生き返らせた唯一の救い

主だということを悟りました。目には涙が激しく、とめどなく流れました。」

初代教会を激しく迫害したサウロがダマスコ途上で主に出会ったように、彼も劇的に主イエスに出会ったのである。

「外に出た瞬間、この世がとても美しくきれいに見えました。午後の日差しがあまりにも美しく、木の葉から雑草に至るまで、すべてが美しく映りました。しばらくは十字架を眺めるだけで涙が止まりませんでした。運転しながら十字架を見かけると涙が止まらず、泣き終えてからようやく再び運転することができました。秋にバプテスマを受けました。妻は漢方医だったので、人道哲学を勉強するほど仏心が深かったのですが、2年ほど伝道した結果、主のもとに立ち帰りました。」

翌年の2008年、彼が33歳の時に博士学位を取得し、すぐにウルサン大学法学科教授となった。イ・ジョンフン教授の名が本格的に知られたのは、10年後の2018年、ウルサンで『同性愛とイデオロギー』を主題とした講義が広く知られてからである。

『法務法人ロゴス』のキム・スングウ長老は、私が宗教自由政策研究院にいた時、反対陣営にいて、お互い法で争った間柄でした。私が回心したと聞いて私に会おうと連絡してきました。彼は、私が本当に回心したことを確認した上で、同性愛の背後に何かあるようだが、その背後を調べて整理してほしいと言いました。そこで私は同性愛について研究し始めました。同性愛は単なる愛ではなく、その背後には性を解体して、人間と家庭を破壊しようとする動きがあります。それが今やヨーロッパを襲いました。嫌悪な言い方をすれば、そういう動きは、まず表現の自由を奪い始め、次に法（差別禁止法）を作ろうとするのです。ここまできると教会は倒れます。だから教会を守ら

なければならない、人々の前に出て伝えなければならないと思いました。そうして、現在の私に至ったのです。」

イ・ジョンフン教授は「韓国教会を嫌悪する現象の根源がどこにあるかを点検しなければならない」と言う。

「人間の尊厳は、結局、神様から追論していかなければ答えを得ることはできません。しかし、イスラムの美化と同性愛擁護勢力は互いに連帯して人間を価値のない存在に落とし、教会をあたかも社会変革の障害・弊害の勢力であるかのように攻撃してきます。」

教会が腐敗し、各種性犯罪が氾濫する中で、なぜ『同性愛』だけを強く問題視するのかという主張には賛否両論があり、問題の本質を曇らせる戦術にすぎないと彼は言う。

「最近、『カゲロウは濾過し、ラクダは呑み込む』という主題で説教する人が多くいますが、同性愛に関連した差別禁止法の立法に反対するのは、カゲロウを濾過するようにささいなことであり、教会が憐れみと正義を喪失し腐敗することは、ラクダを呑み込むことと同じだと主張しています。しかし、同性愛を合法化して権利を保障するイギリスやカナダなどで起きていることは、『カゲロウ』を濾過するようなつまらない問題ではありません。

同性愛に関する説教をすれば逮捕されることが、ささいなことですか？ 説教の自由、表現の自由を失う瞬間、キリスト教は消えてなくなります。ついには、首に十字架のネックレスをつけるだけで、人々に嫌悪感を与えたと言われる日がやって来ます。そうなる前に血を流しても、いや、命をかけてでも悪法をくい止めなければなりません。キリスト者たちは法律の恐ろしさを知るべきです。」

最近、大韓民国の政治、経済、安保、外交が崩れつつあり、

同性愛とイスラム、異端の挑戦に教会が直面している現状で、悲観的で絶望的な見方を持っているクリスチャンたちが多いという質問に、イ・ジョンフン教授は「こういう時代がまさに神様が働かれる時である」と強調する。

「教会が絶望の中にいる時、奇跡やリバイバルが起きます。初代教会の時もそうでした。カルヴィンのジュネーブにも問題がありました。アメリカも同様でした。新大陸を発見して移住した人たちに、後に総体的入教状況が訪れた時、ジョナサン・エドワーズの大覚醒一次運動が起きました。我が国も1907年、平壤(ピョンヤン)で大リバイバルが起きる前までは暗黒期でした。アメリカのリンカーン大統領は南北戦争に勝利した後、奴隷制度を廃止して勝利を祝ったのではなく、国家的悔い改めを宣言したのです。今だからこそ、クリスチャンたちが目を覚まして祈る時であり、行動すべき時なのです。霊的大覚醒が必要です。手遅れになる前に……。」†

＜整理＝キム・ソンホン記者、写真＝ソン・ビョンヒチーム長＞

発行：純福音東京教会・出版部

【翻訳】：李カレン 執事、林俊秀 教育生、間杉綾乃 サモ、李 珍 執事、金原英興 按手執事、
小島優幸 按手執事、朴 宰完 按手執事、金澤由紀子 勸士、趙 芝賢 伝道師、
久保憲司 牧師

【日本語校正】：篠崎 栄 姉妹、今村和世 執事、松谷恵理 執事、吉田綾子 執事、武石みどり 執事、
向川 誉 執事、澤田義則 執事

【印刷・製本】：間杉典生 按手執事

【再編集】：金澤由紀子 勸士
